

今日は天気もよく海も風いでゐるが、もともと天富命は農耕の民阿波の忌部氏をひきゐて、紀伊沖をかすめ房総半島を洗ふ黒潮に乗つて今の安房の地に上陸し、粟・麻・木綿の栽培を教へ、四国の阿波にその氣候がよく似てゐるところから安房と名づけたといふ。いまでも菜の花が日本で一番先に咲くといふ国である。しかし漂流の民は何処からも辿りついたのではなからうか。それらの血はすでに防人のなかにも流れてゐたかも知れない。

萬葉旅行の記

— 鎌倉方面 —

かねての予告の通り十一月二十八日(日)の午前九時、鎌倉駅の待合室に集まつた人々は、会員非会員をあはせて四十余名、仲よく御夫妻お揃ひの方もあれば、お子様連れのお母さま、お父さまもあつて、和氣霽々。折しも鎌倉駅前は、鎌倉一周全国都道府県対抗マラソンレ

い。海洋性の氣候のなかに育つた赫顔の逞しい壯丁が生ひたつたにであることなど思ひながら、和船の櫓を押す漁夫の手もとを眺めたりした。

舟からあがつて時間はまたたつぷりあるが、今度はこれだけにしてみただ直すことにしませうと、利田さんを館山の方へ送り私は千葉ゆきの汽車に乗つて外廻りで帰ることにした。お天気にも恵まれ、明るい房州の地を歩くことの出来たことはたのしいことであつた。

スの出発点となり、数千の観衆がひしめいてゐた。

鶴岡八幡宮の朱の鳥居をくぐり、銀杏の落葉を踏んで、一行はあの見上げるやうな石段の前に立つ。大銀杏の黄葉に晩秋の薄陽がほのぼのと匂ふのも美しい。燃え立つやうな黄葉を背景にして、森本

博士の臨地講義がはじまる。遠き鎌倉時代の歴史的事実を吾妻鑑や金匱集やその他の文献を引いて興味深く語られる博士の頬は紅潮する。談たまたま宋朝暗殺のくだりに及ぶと、あそこ階、この広庭と博士の講義は、きはめて具体的となる。一同は眼のあたりに歴史的現実の幻影を追ふ。

ついで、八幡宮に参拝し、境内にある万葉植物、棟の実を拾ひ、やがて近代美術館の前に出る。館内には、中央アジアの古美術の展観中である。わが国の埴輪に似た出土品、法隆寺の壁画のやうな彼の国の壁画など、古代における芸術の世界における相互の流通影響の跡に驚歎する。

かくて、いよいよ万葉の世界に足を踏み入れる。八幡宮に遠からぬ妙本寺は、権律師仙覚が、万葉集校勘の事業を完遂した遺蹟である。参道の楓の落葉を踏んでかさこそと登つて行く。この参道にも、青苔、厚朴などの万葉植物が少なくない。一行のうちには、年輩のある紳士が、家持の「皇神祖の遠御代御代は布

き折り酒飲みきといふぞ此の厚朴（厚朴がし）」(19)

四二〇五)の歌にあやかるべく、瑕瑾のない大きな厚朴の葉を持ち帰り、それに酒を盛つて飲まうと楽しんでゐる風流な勢も見える。この山ふところは、比企が谷と呼ばれ、頼朝の乳母比企の尼の寓居の跡であり、また比企の尼につながる比企氏の居館の跡である。

妙本寺の本堂は、いま修理中であるが、その傍に、故井上通泰博士の撰に成る「万葉集研究遺蹟」の碑が、半ば傾いて立つてゐる。一行のために、竹内金治郎氏が読みあげた碑文は次のやうなものである。

此地ハ比企谷新釈迦堂即將軍源頼家ノ女ニテ、將軍藤原頼経ノ室ナル竹御所夫人ノ廟ノアリシ処ニテ、当堂ノ供僧ナル権律師仙覚カ万葉集研究ノ偉業ヲ遂ケシハ実ニ其僧坊ナリ。今夫人ノ墓標トシテ大石ヲ置ケルハ適々堂ノ須彌壇ノ直下ニ当レリ。堂ハ恐ラクハ南面シ、僧坊ハ疑ハクハ西面シタリケム。西方崖下ノ窟ハ仙覺等代々ノ供僧ノ埋骨処ナラサル

カ。悉クハ万葉集新考附録、万葉雜考ニ言ヘリ。
昭和五年二月

宮中顧問官 井上通泰撰

菅虎雄書

鎌倉町青年団

吾むした石階を登りきると、懸崖にかこまれた二百坪ばかりの畑である。ここが彼の學僧仙覚律師の朝夕に起居し、ひたすら万葉研究に精魂を傾けたところである。ここで妙本寺住職島田勝存老師の講説を聴く。老師はこの比企が谷の沿革を熱情を以て語られる。時すでに午を過ぎたので、庫裡の奥書院を借りて昼食をする。いろいろのお菓子、果物が交換せられ、たちまち和やかな雰囲気となる。昼食後、日当りのよい書院に坐つて、森本博士の万葉講義がはじまる。

鎌倉のみこしの崎の岩崩の君が悔ゆべき心は持たじ (14三三六五)

ま愛しみさ寝に吾はゆく鎌倉のみなのせ川に潮満つなむか(14三三六六)
薪伐る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつやあらむ

(14三四三三)

これらの歌について、微に入り細をうがった解釈と、考証が行はれる。博士は、「みこしの崎」をば、諸註おほむね稲村が崎としてゐるが、仙覚の万葉集註釈に、腰越の崎であらうといつてゐるのを支持し、新論拠を加へて考証された後、今から現地に行つてそのことを実証しようと結ばれる。

やがて一行は電車で長谷に至り、彼の美男の大仏さまを拝み、「みなのせ川」を見て、ふたたび電車に乗り、腰越に下車した。暮れやすい晩秋の日は、すでに夕霧を曳いてゐるが、一行はいよいよ今日の目的の最後の地点、腰越岬に到着。あまり硬いとも思はれぬ大小の岩々が、岬の壁から顛落したままの姿を横たへてゐるのがあるありと見えた。黄色い面をほのかな夕あかりに匂はせながら、万葉以来、何回も何回も崩れ落ちたであらうやうに。

(森脇一夫)